

明治期以降曹洞宗人物誌（八）

川口 高風

はじめに

本稿は「愛知学院大学教養部紀要」第六十三巻第二号（平成二十八年一月）に所収の拙稿「明治期以降曹洞宗人物誌（七）」の続編である。全項の人物誌が完成した時は『近代曹洞宗人名辞典』と題して刊行する予定で、一日も早い完成をめざし精進している。

凡例

〔見出し項目〕

- 一、収録人物は明治期以降に宗門の発展に活躍した人物で、その出典は「明教新誌」「宗報」「曹洞宗報」を中心に、明治、大正、昭和期以降に刊行された著作や各種雑誌、新聞などから採取した。
- 二、見出しの人名は当時用いた旧漢字とした。事歴の本文は新字体を用いたが、旧字体を使用したものもある。

- 三、見出しの項目はかな見出しを太字で示し、次に漢字を掲げた。
- 四、かな見出し項目は姓と名の間にダッシュを挿入して読みやすくした。

〔見出し項目の配列〕

- 一、配列は五十音順の予定であったが、「い」以降は完成した原稿の順序とした。そのため本稿では「よ」の項をとりあげた。
- 二、同音同字の漢字項目は時代順（没年順）に配列した。
- 三、同音異字の漢字項目は第一字目の画数の少ないものからの順とした。また、第一字目が同画数の時は第二字以降の画数の少ないものから配列した。

〔本文の記述とその順序〕

- 一、本文の記述は敬語、敬称の使用を避けた。
- 二、収録にあたっては居住地、号、字、生年月日、父母、誕生地、受業師、本師、学歴、僧堂安居歴、宗門役職歴、社会的職歴、著作類、示寂（没）年月日、行年、参考文献の順とした。不明な場合は記していない。
- 三、本文は基本的に、編著者が直接、居住地へ問い合わせを行った返書（調査用紙）にもとづいて執筆した。それ以外に参考とした文献は末尾に掲げた。
- 四、伝記中の元号の一番最初（初出）に西暦を入れた。ただし、伝記中の生没年には西暦を入れない。
- 五、寺院の所在地が郡の場合は県を入れ、市の場合は県を省略した。なお、平成の大合併による新市町村名への変更を行っていないものもある。
- 六、居住地は歴住の順序通りでないものもあり、何世か不明な場合は記していない。

よ

よこーすいがん 余語翠巖

大正元年(一九一二)―平成八年(一九六六)

南足柄市最乗寺十八世、四日市市長興寺、亀山市瑞光寺。大正元年九月九日に愛知県南設楽郡鳳来町に生まれる。受業師は黒田鉄巖、本師は黒田鉄背。昭和十一年(一九三六)三月に駒澤大学仏教学部を卒業し、四月より曹洞宗内研究生となる。十四年三月に總持寺に安居。三十六年總持寺講師、三十九年一月に總持寺副寺、四十年七月總持寺副監院、四十四年六月、アスペンス文科学研究所の招請により米国各地に禅セミナー巡講する。十月に曹洞宗師家、總持寺後堂、四十六年十一月、曹洞宗教学審議会委員、四十八年四月、愛知学院大学講師、十一月、曹洞宗経歴調査特別審査会委員、四十九年三月最乗寺専門僧堂西堂、五十一年二月、曹洞宗師家会副会長、五十二年十二月總持寺常任顧問、五十三年三月特別尼

僧堂師家、五十五年五月曹洞宗師家会会長、五十七年三月曹洞宗参議を務める。宗外では保護司、民生委員、選挙管理委員長、人権擁護委員、教育委員長なども務めた。『未来のまま(余語翠巖好夢集)』『生を明らめ死を明らむるは』『これ仏性なり』『禅の十戒』『道はじめより成ず』『禅の古典―伝光録』『正法眼蔵隨聞記のはなし』『正法眼蔵佛性講話』『正法眼蔵弁道話講話』などの著書がある。平成八年十二月二十一日に八十四歳で示寂した。(曹洞宗現勢要覧『跳龍』第五五六号)

よこいーえちよう 横井恵超

慶応三年(一八六七)頃―大正十四年(一九二五)

袋井市極楽寺十九世、掛川市世楽院三十世、豊岡市見性寺十九世、宮津市智源寺三十五世、湖西市蔵法寺十八世、湖西市禮雲寺開山。号は聖山、江南。尾州に生まれる。受業師、本師は白峯寛瑞。曹洞宗専門支校、曹洞宗大学林に入学する。卒業後、比叡山で天台学を学び、その後、曹洞宗大

学林教授に就任、後に可睡齋役寮となる。極楽寺に初住し、一年後に世楽院へ転住、伽藍を整備した。可睡齋の雲衲を接化し、各地の江湖会、授戒会の西堂、後堂として布教教化に尽力した。大正七年(一九一八)、見性寺に転住、八年永平寺単頭となる。九年春に智源寺に昇住し、十年に眼病を発して中風となったため、十三年に退董する。十四年四月二十六日に五十八歳で示寂した。(現代仏教家人名辞典『沢木興道全集』第六卷、『傘松』第二四三号、井上正弘『蔵法寺』)

よこいーけんみよう 横井見明

明治七年(一八七四)―昭和八年(一九三三)

結城市安穩寺三十四世。号は琢宋、雪庵。明治七年六月二十一日に栃木県下都賀郡赤津村に生まれる。受業師、本師は横井智僊。石川素童、西有穆山に隨身する。明治二十年(一八八七)夏、茨城郡間黒の鳳台院の鳥栖越山の再会へ入衆し、二十三年まで専門支校に学び、二十五年には東京哲学

館に入學し、二十八年に卒業。三十二年に總持寺内地留學生に選拔され、法学院で三年間修行する。三十一年には仏教新聞社に入り、高田道見を扶けて「通俗仏教新聞」「和融誌」などの編集を担当する。三十四年に「仏教毎週新聞」を起し、三十八年には「明教新誌」の記者となり、三十九年には加藤咄堂の後を受けて主筆となる。文部大臣安藤正純や森鷗外、姉崎潮風らと交遊があった。著書に『佛教信徒の心得』『戦時講話』『各宗高僧譚』『西有禪話』『四節引導抄』『源翁和尚と殺生石』『高僧穆山』などがある。昭和八年七月三十日に六十一歳で示寂した。(『曹洞宗名鑑』『現代仏教家人名辞典』)

よこいーちせん 横井智僊

一 大正八年(一九一九)

結城市安穩寺三十三世、栃木市長福寺三十世。号は琢明。名古屋市に生まれる。本師は宮地仙岩。大正八年八月九日に示寂した。

よこおーけんしゅう 横尾賢宗

嘉永四年(一八五二)一 大正九年(一九二〇)

岩沼市洞林寺、岩沼市長谷寺、鶴岡市吉祥寺、福島市陽林寺、上山市寿仙寺。号は仏閑。嘉永四年八月十日に宮城県名取郡千貫村大字北長谷の横尾庄作の長男に生まれる。受業師、本師は仏通天宗。慶応三年(一八六七)八月より明治六年(一八七三)三月まで相神百川に、同年より十一月まで荒井如禪に参随する。十七年に曹洞宗大学林を卒業、その後、永平寺、總持寺に二年間安居。愛知県、宮城県中宗林教師、千葉、栃木、茨城三県聯合中宗林教師、宮城県教導取締、第二十五中宗林監理、第二十一中宗林教授を歴任する。三十五年八月には第三中宗林長、三十六年五月に第一中宗林長、四十二年九月に第二中宗林長、曹洞宗大学教頭を歴任した。歩兵第三十二聯隊布教師、支局管内布教師も務めている。詩や書にも通じ、著書に『普勸坐禅儀十回講話』『禅と武士道』『般若心経講話』『道元禪師中心の仏教』などがある。

大正九年八月二十八日に六十九歳で示寂した。(『曹洞宗名鑑』『現代仏教家人名辞典』『宗教時報』第二十七号、『禅学大辞典』)

よこかわーとくじゅん 横川得諱

弘化元年(一八四四)一 昭和七年(一九三二)

東京都海雲寺二十一世、東京都黄梅院。号は覚伝。弘化元年十一月十一日に埼玉県北葛飾郡松伏町に生まれる。受業師、本師は前田朴禅。文久三年(一八六一)三月より明治元年(一八六八)七月まで駒込梅檀学寮に修学する。同年冬、群馬県勢多郡の龍源寺随意会において立職、五年七月に黄梅院の首先住職となる。二十三年十一月に總持寺において転衣、同年海雲寺に転住し、鎮守三宝荒神の信仰を広めて一大霊場となった。昭和七年九月十六日に八十九歳で示寂した。(『曹洞宗名鑑』)

よこすかーほうこう 横須賀豊光

東京都常光寺二十三世、東京都増林寺二十六世。東京都江東区亀戸九丁目の横須賀家に生まれる。本師は須田竹間。東京都宗務所長を務めた。

よこぜきりよういん 横関了胤

明治十六年(一八八三)ー昭和四十八年

(一九七三)

長浜市深高院三十世、長浜市洞春庵二十世、佐野市長慶寺、深谷市儀安寺、山梨市信盛院、長浜市応昌寺、桐生市正泉寺、栃木県下都賀郡吉祥院。号は鷲嶺(嶽)。明治十六年十一月十九日に滋賀県伊香郡木之本町大音の横関半次郎の三男として生まれる。受業師、本師は高橋無学。脇本公鑑、久沢泰印、水上大舟、鈴木竜童、戸田悟雄、田辺靈雄、岩生国学らに参随する。明治三十五年(一九〇二)より長谷寺に安居し高等中学林に入学。三十九年に哲学館仏教専修科及び漢学専修科を併修する。大正五年(一九一六)に宗務院奏者、六年に書記、昭和八年(一九三三)に教学部主事、十年十二月に嘱託、貫首選挙参与員、世田

谷中学建築事務主任、視學員兼任、十五年三月曹洞宗制編成審議会幹事、十六年十月制度調査会幹事、二十二年一月永平寺高祖大師大遠忌事務嘱託、永平寺高祖大師大遠忌準備事務嘱託、常任庶務部長、二十六年五月永平寺副監院、愛知学院短期大学の「宗憲及宗制史」講師、参禅道場師家、總持寺修史局長などを務めた。著述家として多くの著作を遺しており、主要なものとしては『江戸時代洞門政要』『伝光録詳解』『曹洞宗宗制私解』『総持寺誌』『伝光録』(岩波文庫)『伝光録参究の栞』などがある。昭和四十八年三月十四日に九十一歳で示寂した。『曹洞宗現勢要覧』『洞門龍象要覧』『江戸時代洞門政要』横関ふじ江「師父の思い出」、「傘松」第三五七、三九九、三六〇号)

よこたーたいがく 横田泰岳

明治元年(一八六八)ー昭和十年(一九三五)

久留米市千光寺三十世、大川市慈恩寺、佐世保市薬王寺。号は祖道。明治元年四月十

二日に福岡県八女郡川瀬村に生まれる。受業師は徳光台禪、本師は字禪。橋本祖嶽に参随。曹洞宗務支局附属学校を卒業後、明治二十九年(一八九六)に教師検定を受けて三等教師となる。昭和十年一月二日に示寂した。

よこたーほうざん 横田賣山

嘉永元年(一八四八)ー大正九年(一九二〇)

水戸市安国寺二十五世。号は祖慶。嘉永元年八月十五日に茨城県新治郡出島村安食の横田小左衛門の三男に生まれる。受業師は小川菜鳳、本師は法寶全翁。托鉢、説教、品評会などを通じて社会的布教に尽力した。弘化年中(一八四四―四七)に火災によつて安国寺の伽藍を焼失したため、現在地に堂宇を移し、檀信徒の協力を得て再建した。寺禄を回復し、法燈を守つて寺運の隆盛を図る。教育にも関心を持ち、寺の一部を学校の敷地として貸与し、地域の人々に感謝され、学務委員も務め、安国寺の中興となった。大正九年七月十五日に七十八

歳で示寂した。(『現代仏教家人名辞典』)

よこやまーぎかん 横山義寛

明治九年(一八七六)―昭和二十七年

(一九五二)

渋川市福増寺二十三世、渋川市雙永寺、鉦路市大康院二世。号は大康、仙狂子。明治九年一月十九日に越後中蒲原郡新飯田町の横山祐之助の三男に生まれる。受業師、本師は間嶋祖禪。明治二十三年(一八九〇)

に前橋市曹洞小学林に入り卒業後、前橋中学校に入り卒業。三十年曹洞宗大学林を卒業、三十一年四月雙永寺に転住。三十三年福増寺に転住。附近の製紙工場の工女布教に従事し、自坊においては報恩講を結び接化に務めた。また、地方青年会出獄人保護会と連絡して布教に務めた。前橋市曹洞宗中学林教授、四州中学林教授、雙林寺僧堂役員、宗務所長、布教部布教師、免因保護会幹事などを務めている。三十五年曹洞宗教導講習院に入り卒業。四十三年及大正三年(一九一四)には内務省の感化教育事業講習会に出席し全科を修了。同年冬より別

子銅山精煉所附属常在布教師を務め、七年

には宗会議員に就き、八年には大本山巡回布教師、十年より特派布教師を務めた。十四年の北海道巡回布教の折、布教所を建てて定光寺大道英仙を開山に拝請して大康院を開創した。昭和二十七年六月二十日に七十七歳で示寂した。(『曹洞宗名鑑』『現代仏教家人名辞典』『曹洞宗現勢要覧』)

よこやまーきようぜん 横山競禪

明治三十一年(一八九八)―昭和四十六

年(一九七二)

横浜市西有寺五世、横浜市萬徳寺四世。号は齡学。明治三十一年三月二十三日に青森県西津軽郡館岡の横山家に生まれた。受業師、本師は玉田仁齡。森田悟由に参随。西有中学林を卒業し、西有寺認可僧堂に安居した。神奈川県第二宗務所長も務めている。昭和四十六年七月二十日に示寂した。(『洞門龍象要覧』)

よこやまーげんしょう 横山玄彰

明治十四年(一八八二)―昭和三十八年

(一九六三)

福島市安洞院十四世。号は瓦嶽。明治十四年八月二十五日に福島市南矢ノ目谷地の菅野初次の次男に生まれる。初め菅野得全と称した。受業師は横山玄雄、本師は高雲靈道。明治二十三年に曹洞宗中学林を卒業し、東洋大学国漢専門部を卒業。四十一年に曹洞宗教導講習院へ入学、四十二年五月卒業。同年六月より曹洞宗大学に留学する。四十三年より特派布教師を二十有年間、總持寺再建祠堂勸募専師として十八年間、祠堂勸募に従事した。管内布教部布教師、工場布教師、管内布教師(二回)を務める。宗外では福島県製糸同業組合嘱託講師、戦時特別調停委員、福島郵便局精神話講師、県方面委員、県小作調停委員、軍人遺家族指導講師、借家、借地調停委員、金銭債務調停委員、福島刑務所教誨師などを務めた。昭和三十八年七月二十四日に八十三歳で示寂した。(『横山玄彰老師頌徳碑文』『曹洞宗名鑑』『洞門龍象要覧』)

よこやまーこうけん 横山皎賢

安政五年(一八五八)ー昭和十一年(一

九三六)

福岡県田川郡興国寺二十七世、行橋市禅興寺十五世。号は独鏡。安政五年二月十六日に福岡県仲津郡矢留村の有光頭了の三男に生まれる。受業師、本師は横山素鏡、長門功山寺の金山主黄に参随した。明治十五年(一八八二) 四月に駒込梅檀林に入学、十七年十月に函館の高龍寺内専門支校に掛錫し、二十年三月に曹洞宗大学林に入って二十五年四月に卒業。二十三年福岡県第二号専門支校教師、二十五年に大学林寮監、二十六年福岡県小学林教授、四十二年両山山布教師、第三宗務所長、四十四年管内布教師などを務めた。禅興寺任職中は警察署、学林などで宗乗を講演し、興国寺任職中は婦人会を創設して近村に巡回布教し布教伝道、寺門興隆に努めた。昭和十一年五月十日に七十八歳で示寂した。(『興国寺過去帳』『曹洞宗名鑑』)

よこやまーせつしゅう 横山雪洲

明治七年(一八七四)ー昭和十五年(一

九四〇)

行橋市禅興寺十六世、福岡県田川郡興国寺二十八世。号は天溪。受業師は加来雪光、本師は横山皎賢。明治七年十月五日に福岡県京都郡今元村字津留の小正路市六の二男として生まれる。明治三十年(一八九七) 七月に鎮西中学林を卒業、三十五年二月に永平寺で転衣、七月に曹洞宗大学林を卒業、十月には曹洞宗第四中学林副学監に任命された。三十七年九月には同中学林学監に任命される。三十八年十月には依願免職し、四十年十一月には曹洞宗宗会議員に当選した。大正二年(一九一三) 三月には曹洞宗第四中学林学監に任命され、八年六月に依願免職し、九年四月には福岡県第三曹洞宗務所管内布教部委員長に選出された。十一年十二月には福岡県第三曹洞宗務所長に任命されている。昭和十五年十月一日に六十七歳で示寂した。(『歴住世代帳』『現代仏教家人名辞典』)

よこやまーどんかい 横山吞海

ー大正三年(一九一四)

三条市光照寺十九世。号は大心。新潟県南蒲原郡福島村鍋島の横山弥右エ門の二男に生まれる。本師は機参学禅。明治六年(一八七三) から大正三年(一九一四) まで約五十年間、光照寺の任職を務めた。大正三年二月九日に八十二歳で示寂した。

よこやまーりょうせん 横山良仙

明治六年(一八七三)ー昭和二十年(一

九四五)

新城市醫王寺二十七世、新城市新昌寺十六世。号は覺城。明治六年十月一日に豊橋市の横山豊造の長男に生まれる。曹洞宗大学林を卒業し曹洞宗宗務院書記を務めた。新昌寺に義財を募り、鳥居強右衛門の顕彰碑を建てている。昭和二十年六月十日に七十二歳で示寂した。(『現代仏教家人名辞典』)

よこわりーけんぼう 横割拳芳

明治三十四年(一九〇一)ー昭和六十一年(一九八六)

年(一九八六)

富士市成安寺二十九世、富士市曾我寺、富士宮市重林寺。明治三十四年二月二十七日に静岡県富士市上横割に生まれる。受業師、本師は横割純宗。曹洞宗中学位を卒業し、大正十四年(一九二五)には曹洞宗大學を卒業、その後、朝鮮清道成道寺誥布教師、京城別院曹溪寺布教師、管内布教師、宗務所会計などを務めている。昭和十三年に静岡第二宗務所長、静岡県宗務所会長に就任。二十一年に宗議会議員、二十八年に静岡県第一宗務所長、總持寺顧問及び顧問会副会長、瑩山禪師六五〇回大遠忌局会計監査委員などを歴任した。宗外においては県仏教会富士分会長、静岡第一師範学校教務嘱託なども務めた。昭和六十一年八月三十一日に八十六歳で示寂した。總持寺より西堂重興号を授与される。(『洞門龍象要覽』『曹洞宗現勢要覽』)

よしいずみーぜんきょう 吉泉禪教

弘化三年(一八四六)ー大正四年(一九

一五)

鶴岡市善寶寺三十五世、山形県東田川郡寶

泉寺十三世、鶴岡市天澤寺十九世、鶴岡市鳳衛寺二十五世、鶴岡市正法寺四十一世。号は法運。弘化三年六月二十日に山形県東田川郡新堀村の吉泉善五右衛門の子として生まれる。本師は水野禪山。慶応二年(一八六八)九月より明治二年(一八六九)六月まで高田不博に、七月より九年三月まで老梅活宗に参随する。三十年(一八九七)以降、總持寺直末總代、特選議員、宗務支局取締宗務所長などを務めた。慈善学校を起し、宗門指定教育のため新たに僧堂を建立した。貧民に施すなど慈善事業に尽力した。大正四年一月七日に示寂している。(『現代仏教家人名辞典』)

よしうらーとうかい 吉浦透海

文化十一年(一八一四)ー明治三十年(二八九七)

鳥取県日野郡常福寺十七世、鳥取県日野郡龍福寺五世、米子市桂住寺十七世。号は定鱗。文化十一年九月十日に岡山県勝山に生まれる。本師は逸山白林。明治七年(一八七四)十一月に常福寺へ晋住し、八年に晋

山結制、九年に梵鐘を再鑄し、十二年に庫院を再建した。十五年には殿鐘を新添しており、三十年十二月十六日に示寂した。(『過去帳』)

よしおかーしんこう 吉岡信行

ー明治十九年(一八八六)

大崎市石雲寺三十世、奥州市光明寺二十二世、出雲市日光寺。号は宵間、宵閑ともあり。出雲国に生まれる。本師は鐵面清拙。東北布教戒師を務めるなど奥羽地方における在家化導者として名をあげた。『心地観經』に説く四恩と『華嚴經』『梵網經』に説く十善を中心に教化の項目を作っており、浄土三部經なども注解して浄土教との融合による安心立命を説いた。『求化微糧談』『説發願回向文』『説虎列刺予防法手控』『虎烈刺予防法』『破邪顯正論』『釈迦如来在世大和讚』『顯正邪正問答編』『四恩十善談』『参同契宝鏡三昧初和解』の著書があり、曹洞宗で最初に耶蘇教を排撃した人であった。明治十九年十二月二十日に示寂している。(『教導職職員録』『明教新

誌」第一八九三号『明治前期曹洞宗の研究』

よしおかーそぜん 吉岡祖禪

明治二十二年(一八八九)ー昭和五十年

(二九七五)

尾張旭市広徳寺十世。明治二十二年九月三十日に犬山市に生まれる。受業師、本師は安藤玉隆。三川啓明に参随した。第三中学校(愛知中学校)を卒業し両本山巡回布教師、昭和十年(一九三五)以来、中保護区保護司や同副会長、名古屋市民生委員、相生学園主任、愛知育児院理事、名古屋市家庭裁判所家事調停委員、新栄学区遺族会長、雲竜幼稚園理事、名古屋市地方裁判所調停委員、名古屋刑務所篤志面接委員として活躍し、昭和二十八年(一九五三)五月三日に瑞宝章藍綬褒章を受章するなど、その他数々の賞を受けた。二十九年十月二十五日に皇居で天皇、皇后両陛下に特別拝謁し、三十年四月二十五日には永平寺授戒会報恩焼香師を務めた。三十四年十月二十日には天皇陛下より時計を下賜され、昭和五

十年十二月七日に八十七歳で示寂した。

(『洞門龍象要覧』)

よしおかーつぜん 吉岡鐵禪

明治十一年(一八七八)ー昭和十五年

(二九四四)

藤枝市市岳寺二十九世、焼津市正岳寺五世、藤枝市正泉寺十六世、牧之原市石雲院独住八世。号は舜孝。明治十一年三月十七日に静岡県志田郡青島村大字前島の曾根善重の長男に生まれる。受業師、本師は吉岡鐵門。明治二十八年(一九九五)八月に曹洞宗小学校を卒業し、三十一年七月には曹洞宗第三中学校を卒業。三十二年二月から三十四年八月まで天徳寺僧堂に安居した。三十八年に東京麻布の曹洞宗大学を卒業後、神田正則英語学校に学んだ。四十一年には興国寺認可僧堂付属私立中学明道学館の教授を務め、四十二年には大洞院専門僧堂の講師となる。四十四年には静岡県第四曹洞宗宗務所管内布教師に、大正元年(一九一三)十月には呉鎮守府管内軍人布教師に任命された。昭和二年(一九二七)十一

月より曹洞宗大学副学監となり七年まで務めた。また、同年九月より宗乗研究生に、十五年十一月永平寺単頭、五年から九年まで静岡県第四曹洞宗宗務所会議員、七年に

静岡県志田郡仏教慈悲会長、九年五月より十七年五月まで永平寺眼蔵会講師、十年

二月には永平寺後堂に就いた。著作には『遠州高尾山龍門山石雲院史』、『正法眼蔵弁道話新講』があり、「傘松」、「大法輪」、

「大乘禪」などに多くの論稿を執筆した。

昭和十九年十一月十八日に六十七歳で示寂した。(『舜孝鐵禪大和尚科譜』『曹洞宗名鑑』『現代仏教家人名辞典』「傘松」第四九四号)

よしおかーとういち 吉岡棟一

大正三年(一九一四)ー平成九年(一九九七)

福島市円通寺十一世。号は徹山。大正三年十二月三日に福島市舟場町に生まれる。受業師、本師は吉岡東閔。沢木興道に参随した。昭和五年(一九三〇)より九年まで長

禄寺僧堂に安居した。九年三月には福島師

範学校を卒業、十六年に駒澤大学仏教学部を卒業。九年より郡山市喜久田小学校、福島市杉妻小学校、大森中学校の教諭を歴任し、三十一年には福島県宗務所参事、三十五年には宗務所長に当選し、三期務める。四十年十一月には福島県仏教会会長に就任。三十一年にしのぶ保育園、四十一年に福島ルンビニー幼稚園を開設して園長を務めた。四十二年二月にはベトナムに渡り、釈迦休戦を提唱、以後、平和の鐘、日本寺建設、遺児引取り、遺骨収集などのためにベトナムへ四十回訪問する。四十五年には曹洞宗宗務会議員に当選して以来六期務め、五十三年に曹洞宗宗務会議副議長、その後、宗務会議議長、教学部長、駒澤大学理事長、愛知学院大学理事、世田谷学園理事、多々良学園理事などを歴任した。曹洞宗総合特別審議委員会、曹洞宗選挙制度検討特別委員会会長なども歴任している。また、曹洞宗東南アジア難民救済会議を設立し、会長に就任した。平成三年(一九九一)には紺綬褒章を受章した外、数々の表彰を受けた。著書に『福島県仏教史』『禅』『ベトナム仏

教体験シリーズ』上・下巻、歌集に『大道無門』『喫茶去』『みちくさ』があり、昭和四十八年には小説『椿の系譜』で福島県文学賞を受賞した。平成九年三月三十一日に八十四歳で示寂した。(『曹洞宗現勢要覧』『洞門龍象要覧』『宗報』第七四一号、『本葬儀葉』)

よしおかーとうかい 吉岡東海

安政五年(一八五八)―大正六年(一九一七)

福島市円通寺九世。号は百乘。安政五年に二本松藩士吉川宗助の三男に生まれる。五歳の時、道輪の養子となり、興国寺の峻林及び大隣寺の古芳に随侍した。十六歳で古芳について立職し、十八歳の時、永平寺で転衣、十七歳で円通寺の住職となり、四三年間にわたって伽藍復興や宗務に尽力した。大正六年二月十四日に六十歳で示寂している。(『円通寺過去帳』)

よしかわーじどう 吉川義道

―大正元年(一九一二)

名古屋市万松寺三十六世、京都市永林寺十九世、京都府船井郡善入寺九世、京都市福徳寺五世、京都府北桑田郡富春庵。号は大活。京都府船井郡麻気村の田中家に生まれる。本師は黙室義宣。曹洞宗扶宗会、曹洞宗末派総代議員などを務め、両本山の和議を成立させた。『修証義』編纂委員、永平寺顧問にも就き、總持寺の移東に活躍した。總持寺の衆寮は万松寺の僧堂を移築した建物である。大正元年九月十六日に六十六歳で示寂した。(『洞上高僧月旦』)

よしかわーじゅうけん 吉川重謙

明治三十三年(一九〇〇)―昭和六十三年(一九八八)

福島県伊達郡仲興寺十八世、福島市宝積寺二十八世。明治三十三年一月二日に福島市舟場に生まれる。本師は吉川東漸。海蔵寺僧堂に安居した。大正八年(一九一九)九月より昭和三年(一九二八)八月まで福島県信夫郡杉妻村の書記、三十一年十一月より三十五年十一月まで福島県宗務所長、三十六年四月より福島県仏教会副会長に就任

した。その他、福島市雇学課に勤務、福島市共済委員、県方面委員、司法保護委員、司法成人保護司なども務めた。昭和六十三年二月二十七日に八十九歳で示寂した。〔『洞門龍象要覧』〕

よしかわーほうあん 吉川法安

天保七年(一八三六)ー大正三年(一九一四)

日高市谷雲寺十九世、秩父市清泉寺四十世。飯能市中心應寺、埼玉県入間郡高福寺。号は致元。天保七年二月十日に愛知県中嶋郡宮重村の吉川安造の二男に生まれる。受業師、本師は吉峯大澄。文久三年(一八六三)十一月二十八日に永平寺で転衣し心應寺、谷雲寺、高福寺に歴任して、明治二十五年(一八九二)に清泉寺に昇任した。二十八年四月に清泉寺を法幢地に昇格させ、大正三年十二月二十六日に七十九歳で示寂した。〔『清泉寺過去帳』〕

よしかわーゆうご 芳川雄悟

文久三年(一八六三)ー昭和十三年(一九一三)

九三八)

大崎市天性寺三十世、宮城県加美郡宝泉院二十五世、一関市願成寺三十七世、一関市常光寺十八世。号は哲庵。文久三年八月十日に岩手県一関の芳川家に生まれる。本師は佐藤雄明。明治期に本山布教師として全国各地を布教巡回しており、各宗各派との交流も多かった。昭和十三年一月六日に七十六歳で示寂した。

よしだーえつしゅう 吉田悦宗

明治五年(一八七二)ー昭和十四年(一九三九)

福島市陽林寺二十八世、岩沼市長谷寺二十世、上山市寿仙寺二十九世。号は幽谷、大覺。明治五年四月十七日に富山県石動町福町に生まれる。宮城県名取郡千貫村北長谷の吉田甚左衛門の養子となり、吉田と称す。受業師、本師は横尾賢宗。明治三十八年(一九〇五)七月に曹洞宗大学を卒業し内地留學生に抜擢されて、比叡山で華嚴学や天台学を三年間研究した。大正元年(一九一三)に陽林寺に住職し布教に尽力し

た。その後、曹洞宗第二中学校教授、両本山特派布教師を歴任した。大正十四年に寿仙寺へ転任し、昭和十四年六月十日に六十八歳で示寂した。〔『曹洞宗名鑑』〕

よしだーかんゆう 吉田完悠

明治四十三年(一九一〇)ー平成十五年(二〇〇三)

名古屋市太平寺二十八世、篠山市洞光寺四十三世。号は大心。明治四十三年十二月四日に愛知県海部郡飛鳥村の吉田菊松の四男に生まれる。受業師、本師は吉田鉄心。昭和三年(一九二八)三月に愛知中学校を卒業し、七年三月に駒澤大学専門部を卒業、八年三月から九年三月まで永平寺に安居、九年三月から十年三月まで總持寺に安居、十一年三月から三十二年三月まで日泰寺僧堂に安居した。愛知県第一宗務所第十五教区長、覚王山専門僧堂副師、単頭、講師、洞光寺梅花講長などを歴任し、平成十五年十月三日に九十四歳で示寂した。

よしだーけんしょう 吉田顕敬

明治三十五年(一九〇二)―昭和四十八

年(一九七三)

仙台市洞林寺三十七世。明治三十五年に宮城県宮城郡利府村の吉田擔宗の長男に生まれる。号は徳峯。受業師は木村文明、本師は吉田擔宗。曹洞宗第二中学林を卒業し松音寺専門僧堂に安居。昭和四年(一九二七)一月に洞林寺住職となった。宮城県宗務所会計、教区長、宮城県宗務所贊事、司法保護委員や梅檀学園学監、仙台仏教会会長、曹洞宗宮城県宗務所長、県遺族会常任理事、県戦犯者世話人会常任理事、社寺境内地処分審査会委員、日本宗教連盟事務局長などを歴任した。二十七年には洞林寺菅谷不動尊祭典を復活させた。四十三年には沖繩摩文仁丘に慰霊碑宮城乃塔を建立するにあたり、宮城県曹洞宗訪問団団長に就き開眼供養法要の導師を務めている。四十七年にはサイパン島遺骨収集団に同行し、観音像の落慶や戦没者供養の導師を務めた。漢詩や句作を好み、書にも親しんだ。昭和四十八年一月十三日に七十二歳で示寂し

た。(「開山三百五十回忌法要菜」『洞門龍象要覧』)

よしだーげんほう 吉田玄鳳

―大正七年(一九一八)

飯山市弥勒寺二十世、上越市洞仙寺。新潟県高田鍋屋町の吉田十束の三男に生まれる。明治から大正にかけて寺子屋を開設した。大正七年八月三十日に示寂している。

よしだーこうざん 吉田興山

明治四十五年(一九一二)―平成二年

(一九九〇)

篠山市長和寺九世、綾部市龍宝寺十世、篠山市清陰寺十三世、長野市長国寺三十九世。号は雲外。明治四十五年三月二十七日に長崎市の吉田佐太郎の長男に生まれた。受業師は澤木興道、本師は佐久間貞道。昭和十年に東京府立高校を経て東京帝国大学文学部に入學している。總持寺単頭、副監院、横浜刑務所教誨師、本山布教師などを歴任。『早起き人間学』『かぼちゃ和尚の只管打坐』などの著書がある。平成二年七月

二十八日に七十九歳で示寂した。

よしだーこうしゅん 吉田光俊

昭和七年(一九三二)―平成六年(一九

九四)

津島市海善寺七世、愛西市薬師寺。号は實成。昭和七年十一月十一日に愛知県津島市に生まれる。受業師は橋本恵光、本師は吉田恵俊。二十三年三月に津島女子高校を卒業後、永平寺に安居した。永平寺は雲水が戦地へ行ったため少なく、その間を尼僧が護った。福井地震に遭遇したが支援活動を続けており、その後、関西尼学林へ転入し二十七年に送行した。丈三メートル、幅五メートルの二十一條の糞掃衣を縫い上げ、五十九年暮れにインドへ渡り、釈尊成道の日にクシナガラ涅槃堂の涅槃像に搭けられた。平成六年十月九日に六十三歳で示寂した。(「跳龍」第四三五号)

よしだーじつざん 吉田實參

―大正二年(一九一三)

大阪府豊能郡慈眼寺四世。号は愚道。広島

県の吉田権六の二男に生まれた。明治三十三年（一九〇〇）五月に慈眼寺に入寺し、四十四年には徒弟に任職を譲り隠居となる。大正十二年七月十七日に示寂した。

〔慈眼寺過去帳〕

よしだーしゅんどう 吉田俊重

明治三十二年（一八九九）ー昭和五十年（一九七五）

小樽市徳源寺八世。明治三十二年六月一日に福井県坂井郡西里丸岡に生まれる。本師は渡部活玄か大城虎童。昭和四年（一九二九）に立正大学史学科を卒業し駒澤大学布教師養成所を修了した。乾徳寺、總持寺僧堂に安居し曹洞宗布教師、梅花流五級師範に就いた。各宗連合仏教会長、法友会会長、富山県立富山中学校教諭、富山夜間中等学校嘱託、富山県学事指導員、小樽昭和高等学校顧問などを歴任し、昭和五十年三月二日に七十七歳で示寂した。〔洞門龍象要覧〕

よしだーせんじゅ 吉田仙受

ー明治三十四年（一九〇一）

岐阜県加茂郡洞雲寺十九世、米原市円成庵、福井県三方上中郡海蔵院、鳥取県東伯郡光明寺十五世、倉吉市満正寺十七世、天草市東向寺二十二世、天草市迦葉寺二世、名古屋市円通寺二十七世、仙台市輪王寺四十世。号は信叟。鳥取県に生まれる。明治維新後、永平寺の青陰雪鴻の推挙により洞雲寺に入寺し、その傍ら、永平寺、總持寺各僧堂で多くの学人を接化した。明治三十四年八月四日に示寂した。〔洞雲寺史〕

よしだーてっしん 吉田鐵心

明治十四年（一八八二）ー昭和三十三年

（一九五八）

篠山市洞光寺四十一世、篠山市岳応寺、名古屋市成福寺七世。号は大峰。明治十四年一月十四日に愛知県海部郡飛島村の吉田重五郎の四男に生まれる。受業師は原田良禪、本師は山田大啓。杉本道山に参随する。三十八年に曹洞宗大学林を卒業し、曹洞宗第三中学林教師、三十九年には韓国布

教師、大正三年（一九一四）七月より第三

中学林副学監、同教授、十一年には朝鮮布教総監代理、昭和三年（一九二八）に南丹市龍穩寺僧堂師家、十六年九月五日から三十三年四月三日まで日泰寺副住職、日泰寺僧堂堂長、愛知学院短期大学講師、高階龍仙の隨行長などを務めた。その他、韓国黄海道金川郡育英学校主管、京城光武学校主任、漢城中学校教頭、韓国農商工部大臣秘書官、内部大臣秘書官、仏教復興朝鮮大会布教指導員なども務め、布教家としての名をあげた。著書に『六方礼経』『玉耶経の和訳』『鮮文修証義要解』などがある。昭和三十三年四月四日に七十九歳で示寂した。〔曹洞宗名鑑』『曹洞宗現勢要覧〕

よしだーりゅうえつ 吉田隆悦

明治四十年（一九〇七）ー平成十四年

（二〇〇二）

八戸市大慈寺二十世、栗原市養昌寺十六世。明治四十年九月二十六日に青森県八戸市湊町の吉田家に生まれる。受業師、本師は佐藤隆三。昭和八年（一九三三）三月に

駒澤大学文学部仏教学科を卒業後、四月一日より十一年三月三十一日まで總持寺に安居する。十年十二月二十四日に養昌寺十六世となり、十六年一月には西有寺専門僧堂の准師家、十七年九月には曹洞宗第八禅林准師家及び林監。二十二年四月には宮城県矢崎村の農業協同組合、共済組合の組合長に就任し、二十四年四月より二十六年三月まで宮城県同胞援護会島矢崎村会長に就いた。三十年五月十日には大慈寺二十世となり、十月に大慈寺参禅道場を開単し師家に任ぜられる。三十三年より二十二年間、売春防止法青森県推進委員会委員を務め、四十二年二月には福聚保育園を設立し理事長に就任した。その他、四十七年五月に青森県総和会会長、本部理事、五十四年七月に東北福祉大学評議員、五十六年二月に曹洞宗参禅道場師家会副会長、十月に曹洞宗視學員、五十七年三月に西有寺専門僧堂西堂、五月には八戸市新都市土地区画整理事業協議会会長などを歴任した。五十七年にはシンガポールの西有寺復興地鎮祭の導師を務めるなどして、六十三年十一月に八戸

市特別功労者賞を受賞。著書に『幕末明治の名僧西有穆山禅師』『八千とせの松』『悟りの炎』一・二巻、『天地いっぱいの感激』などがある。平成十四年十二月二十七日に九十六歳で示寂した。(『曹洞宗現勢要覽』)

よしだ ーりょうぜん 吉田亮禅

安政六年(一八五九)ー大正十四年(一九二五)

金沢市永福寺三十四世、金沢市伝燈院、金沢市棟岳寺二十九世、青森県下北郡長福寺十九世、青森県下北郡福蔵寺開山。号は大活。安政六年一月四日に青森県下北郡佐井村の久造の二男に生まれる。受業師は脇澤寺の大林、本師は長福寺の大孝。明治十年(一八七七)夏、青森県の瑞龍寺において首座に任ぜられ、十九年より森田悟由に七年間参随する。森田悟由が永平寺六十四世へ昇住したのに随行して僧堂に五年間安居し、二十八年より金沢市の伝燈院に住持した後、棟岳寺に転住した。三十八年に永福寺に昇住して地方布教に従事した。大正十

四年十二月十四日に長福寺において六十六歳で示寂した。(『現代仏教家人名辞典』)

よしなに ーけんこう 由谷憲光

ー昭和四十五年(一九七〇)

金沢市浄住寺、金沢市灯明寺三十世、金沢市長久寺二十六世、金沢市覚心院二世。号は泰龍。石川県鳳至郡野村に生まれる。名古屋禅学林に安居する。總持寺本山布教師、石川県曹洞宗宗務所長、布教部委員長、管内布教師、曹洞宗宗会議員などを務めた。宗外では司法保護委員、保護司、金沢刑務所教誨師、全日本宗教平和博覧会第一仏教館委員長、仏教中央会館建設推進委員、石川県宗教連盟常務理事などを歴任し、昭和四十五年三月一日に示寂した。(『洞門龍象要覽』)

よしづ ーけいかん 吉津契寛

ー明治二十五年(一八九二)

広島県神石郡宝泉寺十八世、広島県神石郡安楽寺十七世、尾道市見性寺十八世。号は通峰。広島県御調郡東村に生まれる。荒廃

していた宝泉寺に入り、檀信徒の協力を得て諸堂を修復し、梵鐘を铸造するなど宝泉寺を再興した。明治二十五年十月二十七日に四十四歳で示寂した。(『明教新誌』第一三三二号)

よしづーだいげい 吉津大鯨

安政五年(一八五八)―大正十三年(一九二四)

福山市昌源寺九世、福山市広福寺十三世、福山市龍興寺二十一世。号は巨山。安政五年十月十二日に広島県福山市西町の岩本徳左エ門の六男に生まれる。受業師は弥山大高、本師は宏巖覚量。明治七年(一八七四)夏、潮方寺圭道の初会に入衆し、八年四月より十一年三月まで、尾道の天寧寺の嘿仙の下に安居した。体は小さいが理知的な人であったと伝えられている。大正十三年十月八日に六十七歳で示寂した。

よしづーだいゆう 吉津大雄

明治十年(一八七七)―大正五年(一九一六)

福山市龍興寺、竹原市海蔵寺十世。号は實山。明治十年十月十五日に備後深安郡吉津村に生まれる。受業師、本師は吉津大鯨。

明治二十四年(一八九一)夏、竺山嘿禅に入衆し、二十九年冬、天寧寺で立身、三十一年九月に吉津大鯨に嗣法した。天寧寺僧堂に安居すること多年に渡り、後に広島中学院を卒業した。新居浜市の瑞応寺僧堂にも多年安居した。三十三年九月に永平寺で転衣し、龍興寺の住職となる。管内布教師として地方布教に尽力した。四十五年に朝鮮布教師に任命され、朝鮮半島の慶州に駐在して布教所を建築し、植民伝道家として活動した。大正五年十月九日に示寂した。(『曹洞宗名鑑』)

よしづみーれいじゆ 善積靈珠

天保十一年(一八四〇)―大正三年(一九一四)

京丹後市正徳院二十二世、兵庫県美方郡幸徳寺十五世。号は海天。天保十一年四月二十日に丹波国氷上郡成松町の吉積治右衛門の三男に生まれる。受業師は見性寺の靈

鳳、本師は帰仰寺の全英。弘化三年(一八四六)に七歳で得度し、九歳で誓願寺禅岩の結制に入衆して、文久元年(一八六一)に但馬美方郡の帰仰寺全英の室に入り大法を相続した。三年に幸徳寺へ晋住し、慶応

二年(一八六六)八月に總持寺で転衣、安政二年(一八五五)より文久二年(一八六二)まで孝顕寺の鐵面清拙に随侍し、明治五年(一八七二)まで十七年間、薫陶を受けた。九年冬、初会結制を修行し、十七年に正徳院へ転住した。公職として豊岡県僧侶教導取締に任ぜられたのを始め、支局副取締、取締心得などを歴任した。布教活動に尽力し、檀信徒に懺悔文や帰戒文、高祖の御詠歌と南無釈迦牟尼仏を唱えさせた。大正三年三月二十七日に示寂した。(『曹洞宗名鑑』)

よしとめーしんどう 吉留進堂

大正二年(一九一三)―昭和五十三年(一九七八)

佐野市興福寺十九世、再住二十一世。号は無門、篁雀庵、月叟。大正二年に栃木県安

蘇那佐野市蔵之内の吉留隆堂の三男に生まれる。受業師は樋口延保、本師は吉留隆堂。鷲見徹道に参随する。昭和三年(一九二八)西有寺に安居し、六年には西有専修中学を卒業、七年には日下部春秋夫妻と共に歌誌『春秋』を発行した。九年に駒澤大学専門部仏教科を卒業し、修善寺僧堂に安居した。同年に興福寺住職に就く。戦時中、保坂玉泉に二十世住職を依頼し、二十一年に二十一世として再住した。詩作を好み、『火坑』(詩集)『禅門引導香語集』『続禅門引導香語集』『新禅門引導香語集』『月叟語録』など多数の著書がある。昭和五十三年十二月二十三日に六十五歳で示寂した。(『興福寺過去帳』『月叟語録』『跳龍』第三六六号)

よしとめーりゅうどう 吉留隆道

一 大正十年(一九二一)

佐野市興福寺十七世。号は祖山。得度師、本師は吉留覚堂、滝谷琢宗に参随する。永平寺に約六年間安居し、曹洞宗地方布教部委員長として活躍した。栃木県立佐野中学

校を創立するため、同志とともに本堂に東明学舎を二年間開き、中学校ができた後に廃舎した。大正十年五月二十日に示寂している。(『現代仏教家人名辞典』)

よしながーてんねん 吉永天然

一 明治三十七年(一九〇四)

佐野市本光寺四十三世、佐野市万福寺。号は天然。明治三十七年五月二十二日に示寂した。(『歴住世代帳』)

よしひろーぜんえい 吉廣全英

明治二十一年(一八八八)一昭和三年

(一九二八)

福岡県京都郡松山寺三世。号は文之。明治二十一年六月三十日に福岡県京都郡苅田町集の吉廣全機の長男として生まれる。受業師、本師は片山文器。明治四十三年(一九一〇)七月六日に曹洞宗第四中学林を卒業し、四十五年七月四日には曹洞宗大学予科高等科を卒業した。布教師で、昭和二年(一九二七)に松山寺の再建を誓願とし、三年には佐世保市西方寺の説教で病とな

り、三月二十八日に示寂した。

よしみつーげんき 儀満玄機

明治十四年(一八八一)一昭和二十七年

(一九五三)

山口県大島郡浄福寺十世、山口県大島郡元正寺十三世、韓国京畿道開城正福寺開山。明治十四年一月一日に山口県大島郡大島町の儀満兵治の二男に生まれる。受業師は大村玄英、本師は佐川玄彝。北野元峰に参随する。明治三十八年(一九〇八)に曹洞宗大学を卒業し、四十四年に朝鮮語研究生として渡鮮、四十五年朝鮮布教師となる。大正九年(一九二〇)から十四年まで両本山巡回布教師、十年から宗議会議員を務め、昭和十四年(一九三九)から特派布教師を務めている。農村寺院の疲弊を憂い、その救済を訴えた。二十七年二月二十日に七十二歳で示寂した。(『曹洞宗名鑑』「宗教時報」第九十八号)

よしむらーゆうほう 吉村雄鳳

明治八年(一八七五)一昭和三十三年

(二九五八)

前橋市龍海院三十四世、前橋市教徳寺中興開山。号は禅龍。明治八年十一月二十五日に伊勢宇治山田市河崎町に生まれる。受業師は満光寺の國龍、本師は前田大峰。曹洞宗教導講習院を卒業し、明治三十六年（一九〇三）に二十九歳にして函館軍人布教師に任ぜられ、永平寺東京出張所常在布教師も兼任した。両本山春期巡回布教師、曹洞宗財務部主事、人事部主事、公選宗会議員、庶務部主事、樺太巡回布教師、宗議会議選議員、視學員、戦時特派布教師、管長代理として各地陸軍病院慰問、特派布教師などを務めた。宗外においては東京通信局嘱託講師、県協力会議員、軍事保護院嘱託講師、大政翼賛会前橋支部顧問、大日本傷痍軍人教化指導講師、県宗教団体連合会常任講師、大日本戦時宗教報国会群馬支部顧問などを務めた。大正三年（一九一四）十月には、前橋市龍海院の周随禎三が徳を慕って後任に屈請している。著書に『観音経説教』『修証義説教』『因縁百話』『普勸坐禅儀通解』などがあり、昭和二十九年九

月九日に八十一歳で示寂した。（『曹洞宗名鑑』『現代仏教家人名辞典』『曹洞宗現勢要覧』『是字寺龍海院誌』）

よつやーどううん 四津谷道雲

明治二十四年（一八九一）―昭和四十七年（一九七二）

高岡市瑞龍寺二十九世。号は大安。明治二十四年三月二日に富山県射水郡水戸田村に生まれる。旧姓は富田氏。受業師、本師は四津谷洞龍。大正四年（一九一五）に曹洞宗大学を卒業し、両本山布教師、富山尼僧学林長、宗議会議員、宗議会議副議長、准師家などを務めた。宗外においては小作調停金銭債務調停員、養徳園高岡支部長、県方面委員、少年教護委員、県方面委員詮衡委員、方面委員連盟副会長、司法保護司、高岡職業紹介連絡委員、高岡区司法保護委員会会長、人権擁護委員、家事調停委員などを歴任した。昭和四十七年六月七日に八十四歳で示寂した。（『洞門龍象要覧』『高岡山瑞龍寺』『瑞龍寺展図録』）

よつやーどうりゆう 四津谷洞龍

慶応元年（一八六五）―大正十年（一九二一）

高岡市瑞龍寺二十八世、高岡市久昌寺二世。号は曹溪。慶應元年三月二十一日に富山県上新川郡熊野村の四津谷忠平の二男に生まれる。受業師、本師は徳山了古。明治二十二年（一八八九）に富山県専門支校を修了する。二十二年から二十七年まで金澤泰山、田村大機、孤峯白巖らに参随する。三十年七月東京曹洞宗中学を卒業し、三十五年には曹洞宗大学林を卒業。三十四年に高岡市久昌寺の住職となり、三十七年に瑞龍寺へ転じた。四十二年四月、管長より曹洞宗師家を認可され瑞龍寺僧堂の雲衲を接化した。資性綿密淡泊で、總持寺祖院の後堂を拝命して雲衲育成や布教伝道のために力を尽した。大正十年十一月十一日に五十六歳で示寂した。（『曹洞宗名鑑』『現代仏教家人名辞典』『大日本人物名鑑』『高岡市史料集』『高岡山瑞龍寺』『瑞龍寺展図録』）

よなづみーどうりん 米積道林

弘化四年(一八四七)ー明治三十七年
(一九〇四)

鳥取県日野郡永福寺十五世。号は柏苗。弘化四年三月十日に鳥取県八橋郡三本杉村の馬野仁郎の次男に生まれる。受業師は鳳林獨翁、本師は東柏瑞。信叟仙受到に参随している。慶応二年(一八六六)冬、鳥取県東伯郡の満正寺前住職信叟仙受の再会に首先安居し、明治四年(一八七二)夏、倉吉市源徳院前住職一頓活翁の初会で首座を務める。六年に東柏瑞の法を嗣ぎ、十年一月九日には總持寺で転衣し、十月九日に永福寺へ首先住職した。二十六年には永福寺の「登坂観音大士全図」と「七類大日如来全図」を画いており、檀信徒の信望が厚かったところから、道林と等身的地蔵尊が建立されている。三十七年十一月四日に示寂した。(履歴書「永福寺縁起」)

よねだーせきじゅん 米田石順

ー大正二年(一九一三)

福岡県田川郡高座石寺十九世、北九州市大

興善寺十九世。号は鐵応。福岡県京都郡行

橋村に生まれる。本師は東海仙洲。明治二十年(一八八七)頃に高座石寺の観音堂を再建し、二十二年に大興善寺へ転住した。

大正二年八月二十四日に示寂している。

(高座石寺歴住世代録)

よねはらーはくりん 米原伯隣

安政五年(一八五八)ー大正六年(一九

一七)

鳥取県岩美郡竜岩寺十二世、鳥取市天徳寺二十八世。号は仙邦。安政五年十二月二十三日に因幡国邑美郡行徳村の米原重次郎の二男に生まれる。受業師は爲徳崇隣、本師は原田透隣。日置黙仙に参随する。明治四年(一八七二)に天徳寺に首先安居し、七年四月より八年十二月まで丹波国円通寺の日置黙仙に就いて修学、九年には因幡国邑美郡吉成村の吉成寺住職豊田仙如の初会で立職、同年八月二十四日に竜岩寺住職の原田透隣の室に入って嗣法。十三年五月二十三日に總持寺で転衣、二十二年には竜岩寺において初会を修行した。曹洞宗地方布教

部委員長を務め、大正六年二月二十二日に示寂した。(『現代仏教家人名辞典』)

よねもとーこうがん 米本孝巖

ー昭和三十一年(一九五六)

愛知県知多郡乾坤院九世。号は雲峰。昭和二十二年(一九四七)七月九日に乾坤院の住職に任命される。二十三年に晋山開堂する。同年には宗会議員に当選し、二十四年から永平寺貫首随行長を十数回務めている。布教師としても名声があり、在職中、禅堂の修復や本堂畳替、浴室の修理などを行った。「乾坤院大通講」を組織して営繕の基金とした。三十年には専門僧堂を開単し、三十一年には聚福院(現在、長久手市)へ帰って十月八日に示寂した。(『傘松』第二五二号、宇宙山侍者寮編『乾坤院』)

よねもとーずいほう 米本瑞鳳

明治八年(一八七五)ー昭和二十六年

(一九五一)

名古屋市梅壽院七世、恵那市天長寺七世。

号は翔南。明治八年十二月二十一日に尾張国春日井郡山田村大野木の米本勘助の三男に生まれた。受業師、本師は玄同圭宗。杉本道山、西有穆山、岩佐普潤に参随した。明治二十年（一八八七）から二十九年まで鳴海の瑞泉寺に安居し、二十九年四月から三十二年十二月まで比叡山大学林に留学した。三十三年に天長寺へ晋住して仏教青年会、尚齒会修養部などを組織し地方布教に尽力した。大正二年（一九一三）十月には伊予別子鉱業所布教師、三年七月には台湾布教師を務めた。書、漢詩をよくしたが、昭和二十六年六月十九日に七十七歳で示寂した。（『曹洞宗名鑑』）